

### 旅することへの想像力、あるいは人文主義の危機の時代に

教育システム研究開発センター員 鮫島京一（附属中等教育学校）

好きな本の1つに、18世紀イタリアの人文主義者ジャンバティスタ・ヴィーコ（1688-1744）の『新しい学』（1744年）がある。10年以上のつきあいにも拘わらず、一知半解なのだが、ヴィーコはこの作品で三つのことを述べている。

第一に、人間の歴史は、自然界の歴史、神が与えた神聖な歴史とは異なり、あくまでも人間がつくったものである。第二に、人間が自らつくった歴史であるからこそ、私たちはそれを理解できる。この二つの事実に立脚した「学」が、「新しい学」である。

「なんだ、あたりまえじゃないか」とおもう人がいるだろう。そのとおりである。このあたりまえのことを最初に言ったのがヴィーコなのである。ここに彼の哲学者としての天才的独創性がある。端的にいうならば、人間の歴史を、（デカルトやベーコンのように）受け手の視点からではなく、つくり手の視点から読み解くのが「新しい学」なのである。

ヴィーコがいなければ、今日の人文・社会科学はもちろん、国語や英語、そして社会科の授業もなかっただろう。なぜならば、私たちが自らの手で、歴史や文化、そして社会を理解することができるという「確信」（『新しい学』）がなければ、こうした事柄について学ぶ意味はないからだ。学ぶことはきわめて人間的な営みであり、人間の尊厳を具体的に表現するものである——この考え方が人文主義である。したがって人文主義は、人文・社会科学における学びに限らず、自然科学や芸術・身体表現領域における学び、そして日常生活における学びをも基礎づけている。『新しい学』のねらいは、人文主義に基づいて、学ぶことの原理を人々に示すことにあった。

ところが現在、学ぶことの土台を支える人文主義そのものが破壊されつつある。人間の尊厳を打ち砕く事件・出来事は枚挙に暇がなく、ここにその世界的規模での進捗状況が伺えるだろう。人文主義の危機は学ぶことの危

機だ。そしてそれは人間の尊厳の危機でもある。時代は「新しい学」ではなく「古い学」へと向かっているようだ。つくづく、およそ260年前にヴィーコが示した「新しい学」は、いまだに「新しい」とおもう。つくり手の視点で人間の歴史をとらえることは、「勉強は自分でするもの」「自分で考える力をつけること」という、この学校でよく耳にすることに関わっている。よく言ったり、聞いたりするということは、つくり手の視点をもてない人間が多いということなのだろう。この二つのようなことがこの学校で語られるとき、そして自分が語るとき、永遠の眠りを妨げられたヴィーコが、奈良まで引っ張り出され、私たちの頭の上を寝ぼけ眼で歩かされているのではなかろうかと、私は想像しているのである。

ところで、『新しい学』にはヴィーコの悲観的な見方も述べられている。すなわち、人間の精神には限界があるということである。神でないからだ。どんなに努力しても、人間はあらかじめ限定された精神でものごとをとらえるのであるから、私たちの知識はすべて不完全である。また、人間の知識は、自分が生きている時代や価値観によって限定されるので、これまた不完全なものとなる。かくして、過去やよその社会や文化についての私たちの理解は、二重に限定され、不完全なものとなる。したがって、歴史や文化、そして社会、せんじつめて言うならば、「他者」を理解しようとする私たちの努力はすべて、実体ではなく、近似のものにとどまる定めとなる。言葉をたどるが、いつもたどりつけない——人間の理解は悲しい宿命を背負わされているという指摘である。このような人間の精神の弱さと狭さを正面から見据えたヴィーコは、『新しい学』の結論部分において「摂理」という言葉を多義的に繰り返している。いずれにせよ、サルトルふう—if いうならば、私たちは、終わりのなき旅をつづける刑に処されているのである。さて、どうしようか。

がっかりすることはない——私はそうおもう。いつで

も旅することができるということだし、現に旅をしているということになるからだ。追いかけているのがいい。心配ない。沈む夕陽はどこかの朝日だ。何度でも旅することができる。たどり着かなくても、楽しむことができるはず。実際にヴィーコ以降の人文・社会学者は、そして自然科学者も、大いなる旅を続け、今日に至っている。その旅で見つけた宝物の多くは人間の生活を豊かにしてきた。どんな旅でも聖者は宿るものだ。旅が終わる必要はない。そう、この感じでいこう。

昨年の10月、ある生徒から手紙をもらった。生成りの便箋4枚からなる手紙である。細い黒のボールペンで几帳面にしたためられていた。何度か書き直したのだろう。書き損じも、誤字もない。字もきれいに配置されていた。手紙の内容はもちろんだが、こうしたところにも書き手の誠実さ、真剣さがにじみ出ている。

旅に誘われたのだ。文面をたんに読み進めるというような旅ではない。ヴィーコがいうように言葉をたどる旅である。人の書いたものを読み、その人の内面やかれに影響を与えている現実がもつ意味を想像し、理解する。そして、自分がうけとめたことをあなたから受けとったと話し、さらにそれをきっかけに、互いに協力して深めていくことができるように返事を書く。旅から旅へ、だ。もちろん、こうした旅には、誤読や飛躍がともなう。道を見失ってしまうこともある。行き違いだってある。どんなに正確に理解しようとしても、書き手がこめた思いすべてがわかるはずはなく、ヴィーコがいうように、どこまでいっても近似なものとならざるをえない。それ

でもなんとかすべてを読み解こうと試みるのだ。「知的」な対話は、流されない凜とした論理を縦糸とし、相手にたいする信頼を横糸とする言葉によって織られていく。それは「知的な遊び」なのである。同伴者のいる旅だ。そう思いながら、返事を書いた。

しかし、彼女と私が交わしたような、長文の切実な手紙をやりとりする習慣は、今日の知的相互関係の場面から、また、友情を確かめ合う方法としても、失われてしまったようにもみえる。旅することについての理解がさらに限定され、旅することそのものが、何か特別のことであるかのような錯覚が広がっているようだ。これが人間の理解を限定する第三の要因、きわめて現代的な限定要因の姿（権力の内面化、あるいは自己規律化の問題）であろう。人間が自らの手で自らの理解を限定するのである。旅行産業や情報産業は、こうした錯覚に現実味を与えるところに力を発揮しているようにみえる。彼らは呼びかける。「旅することは特別なことであり、非日常的なことであり、しかもそれは金しだいですよ」——そのようなものとして受けとめがちな私たち。この構図である。「旅すること」を「学ぶこと」に置き換えてみれば、ここにも人文主義の危機が読み取れよう。

旅することへの想像力を取り戻そう。日常のなかで旅することができる。その場にながら、誰かが誘ってくれる旅がある。旅することは何ら特別なことではない。いつでも、どこでも、誰とでも、旅することができる。まだ、遅くないはず。きっと、取り戻せるはず……

## 附属学校園「研究開発学校」 2年目の取り組みについて

### ——学校種間連携活動「かがくのひろば」「さんぽでみつけた」の記録——

教育システム研究開発センター員 柿元みはる（附属幼稚園）

附属幼稚園・小学校・中等教育学校は、文部科学省研究開発学校指定（「幼・小・中等15年間にわたり事物認識とその表現形成の徹底化を通して、独創的で『ねばり強い』思考能力を育成する教育課程の研究開発」）を受けて、2年目になります。この研究で大きな柱となる取り組みに「学びの協同性育成のための取り組み」があります。その中の取り組み「はてな？の広場」は校種間連携活動で、生活を異にする他校種異学年の子ども同士が、自他の生活圏で〈モノ〉や〈コト〉を介した学びあい教えあいの交流を行うことにより、別の視点から事物の可能性を再発見し、事物認識を深め、新たな表現活動の形成を促すことを目的としています。

1年目の取り組みを基に、今年度も様々な取り組みを

行いました。その中から、幼ー中等、小ー中等の連携活動である「かがくのひろば」（10月25日実施）、幼ー小の連携活動である「さんぽでみつけたよ」（10月下旬～11月中旬に実施）、の二つの実践を紹介します。

#### 1. かがくのひろば

〈幼稚園会場〉

【活動名】「折って切ってみよう」

【対象児】 年中児62名 年長児63名

中等サイエンス研究会（数学班）1年4名

【内容】 中等教育学校の「サイエンス研究会」のメンバーが、幼稚園児に、紙を「折って」「切って」「開く」

ことによってできる形の面白さ、不思議さを伝える。

〈小学校会場〉

【活動名】「壺の中」(数学班)

「DNAに触れよう」(生物班)

【対象児】 6年星組37名 6年月組40名

中等サイエンス研究会

数学班1年4名 生物班3年3名

3限と4限で月組と星組が交代し、それぞれ数学と生物の両方のプログラムを体験する。

【内容】「サイエンス研究会」のメンバーが、科学の面白さ、不思議さを伝える。

- ・「壺の中」・絵本「壺の中」の世界をワークシートを使い「大きな数」を追体験していく。
- ・「DNAに触れよう」・遺伝情報であるDNAを抽出し、目に見える形にして触れる。

## 2. さんぼでみつけた

【対象児】 幼稚園5歳児2組 32名

小学校4年月組 38名

【内容】・幼稚園2組(年長児)と小学校4年月組が、一緒に散歩し、そこで見つけたものについて発表したり、そのことについておたずねしたりする。4年生は散歩して気づいたこと、さらに自分で調べたことなどを1枚の

画用紙にまとめ、観察記録を作成する。年長児は散歩して見つけたものを使って、紙に貼ったり、動物、額縁、車などを製作したりして発表した。

「かがくのひろば」では、中等生は6・7歳離れた園児へ伝えることの難しさを感じ、より伝わりやすい行動や言葉で伝えようとする工夫が見られました。小学生は「ブロッコリーのDNAがとりだせるなら、マンモスのDNAを取り出して復活させられるのかな？」と科学の不思議さと驚きだけでなく更なる可能性を見出す子どももいました。「さんぼでみつけたよ」では、園児は自分の作品を大勢の友達に伝えるスタイルややりとりの仕方を4年生から学び、4年生は園児の思いを汲みながらかわったり、自分の研究を園児にわかりやすく伝えるための言葉を選びながら説明したりする姿が見られました。我が附属学校の特徴は15年間続く教育です。その特長を生かして、いろいろな年齢差での交流活動を行うことができました。これらの取り組みから、文化の違う他校種異学年の交流は、憧れや思いやりを育てるだけでなく、交流によって新たな視点を得て、自分の認識を深め、更なる表現形成へつながっていくことを確認することができました。校種異学年の交流は、憧れや思いやりを育てるだけでなく、交流によって新たな視点を得て、自分の認識を深め、更なる表現形成へつながっていくことを確認することができました。



## 奈良女子大学附属小学校 学習研究発表会

教育システム研究開発センター員 阪本一英 (附属小学校)

2008年2月14日(木)15日(金)の両日、附属小学校で「学習研究発表会」を、全国各地から約1200名の参加者を得て開催することができた。

今年度の学習研究発表会は、主題を『「奈良の学習法」確かな学習力を育てるすじ道』として二日間にわたって発表を行った。一日目は、14の公開学習とそれに続く研究協議会、そして上智大学の奈須正裕先生に「子どもをまなざす教育」と題してご講演をいただいた。二日目は15の公開学習に引き続き、4つの分科会、そして本校教

諭3名による鼎談「学習法の今日的意義を問う」を行い、本校での実践の要諦を発表した。

### 1. 公開学習・協議会

しごと・けいこ・なかよし(奈良プラン)の公開学習を行った。どの公開学習でも、子どもを主体とし、子ども自らが学習に取り組む様子が展開できた。

また、協議会では、公開学習での子どもの姿を振り返りながら、子どもを主体とした学習を通して培われる確

かな学力や、それを育てるための教師のかかわりなど、各方面からの検討を行いながら、実りの多い協議を行うことができた。

＜参会者の感想＞

「あまりの衝撃に、今でもまだ身震いをしております。このような形態の学習を見るのが初めてだったからです。」  
(兵庫県)

「子どもたちが型にはまることなく伸びやかに育っているのをどの授業からも感じました。」  
(愛知県)



## 2. 講演

上智大学の奈須正裕先生に「子どもをまなごす教育」という演題でご講演をいただいた。

奈須先生のご講演は、われわれ教師が日頃出合うと思われる様々な具体的場面を示されながら、分かりやすく具体的に、しかもユーモアを交えて、どのように子どもをまなごしながら教育を進めていくのかを教えてくださいという、たいへん有意義な講演であった。

＜参会者の感想＞

「講演会で話された『子どもを信じてやってみる。』という姿勢で、日々の授業に取り組んでみたいと思いました。」  
(静岡県)

## 3. 分科会

次の4つの分科会を行った。

- A. 子どもの学びを支える教師の働き
- B. 表現力を高める「奈良の学習法」
- C. 子ども中心の授業づくり  
～取り組みの過程と子どもの育ち～
- D. 子どもが学びをつくる独自—相互—独自の学習

それぞれの分科会に本校教諭が4名ずつ参加し、互いの主張を絡ませながらテーマについて深めるように発表を行った。

今年度参会をいただいた先生方からも、多数の意見をいただいたのだが、それらの意見からは「基礎・基本」を確実に培うことへの傾斜が強く感じられた。公開学習

で見ていただいた子どもたちの姿からの話し合いも含め、子どもを主体にした学習で確かな学力を培うことについての本校の考えを伝えることができたと感じている。

＜参会者の感想＞

「奈良の学習法（教師が教え込むのではなく、子どもの好奇心や探究心を刺激し、こどもの学びをサポートしていく）の研究内容がよく分かる授業や分科会でした。自分の追究したい事柄についてとことん調べ、先生の言葉かけによって、さらに深く追究したり学級全体に広がっていったりとところが素晴らしいと思いました。」

(静岡県)



## 4. 鼎談

本校の廣岡正昭・梶田萬理子・日和佐尚の三教諭による鼎談（ていだん）を行った。

本鼎談では、わたくしたちが唱える「奈良の学習法」の精神と、具体的な形としての実践における特色を確認しながら、それぞれが教育の今日的課題に対してどのように応えていけるのかを、具体的事例を挙げながら伝えようとした。最後まで席を立つ参会者も少なく、充分に私たちの主張を聞いていただけたように思う。

＜参会者の感想＞

「心に残ることばがたくさんあったてい談でした。奈良の教育は素晴らしいと改めて思いました。」(愛知県)



## 07年度「メディアリテラシー・プロジェクト」の研究活動の一例について

教育システム研究開発センター員 鮫島京一（附属中等教育学校）

- 日 時：2007年12月22日（土）13時30分～18時
- 場 所：キャンパスプラザ京都 第3講義室
- 参加者：約80名
- 報告：メルプラッツ第5回公開研究会【第二部】「番組制作から何を“学ぶ”のか」において「文化と社会」の射程、あるいは方法としてのメディアリテラシー」という題名で、鮫島京一と受講者6名（卒業生5名、在校生1名）が協力して報告を行った。

### ■報告内容：

メディアリテラシーという言葉に着想をえた「文化と社会」という授業を展開しています。高校社会科の公民科（文化・思想領域）と美術科の融合教科（二年生社会科選択科目）です。この授業は、奈良女子大学に設置された、教育システム研究開発センターの研究プロジェクト（「リベラル・エデュケーション・プロジェクト」）でもあります。そこでは、生徒が抱えている問題に寄り添いながら、論理的思考力や言語能力の基礎、学ぶ意欲といった意味での学力を形成すること、端的にいうならば、自己陶冶の方法をつかませる教育実践のあり方を追究しています。

学校教育の現場では、学習集団を形成することがむずかしくなってきました。ここに生徒が抱える問題があると考えています。また、従来の教科教育の枠組みにも問題があると考えています。例えば、私が担当している公民科の場合、制度論中心で、文化・思想領域は周縁化されています。現代社会の中心的特徴であるメディアや表象の問題、あるいは文化的ヘゲモニーの問題をどう考えるかといったことは扱いにくい。さらに、メディアリテラシー教育の議論にたいしても、学校現場から見ると不満がありました。鈴木みどりさんたちの議論では、「クリティカルになること」が強調されるにもかかわらずクリティカルとはどういうことかという問いが見えにくく、またクリティカルとなることを阻むものへの視点が弱くと観じられました。水越伸さんたちのメル・プロジェクトの実践は、メディア表現に力点がおかれ、制作の楽しさや難しさをおしてメディアリテラシーを形成し、その過程で考えることを身につけさせるという点において興味深いものですが、そのままでは学校現場で通用しません。年間のカリキュラムにしなければならないのです。

そこで、考えたのが「文化と社会」という授業です。書くことから撮ることへつなぐことを意識し、同時に、言葉へのこだわり、つくることへのこだわり、話しあ

ことへのこだわり、の三つを大切にしました。授業は、講義→作品制作→相互批評→自己評価と展開します。評価方法については、生徒が作成した自己評価表の記述を読みとる方法を探りました。重視するのは、作品の出来ではなく、生徒が学習課題に取り組むなかで学び取ったことです。

2005年度のカリキュラムをご紹介します。二期制になっています。I期はまず「作り手」と「読み手」との関係について学びます。次に、イメージを言葉で表現します。四人一組で言葉をモチーフに一枚のテーマを絵に表現します。できた絵を見て、そこからうけるイメージを200字で書きます。

その次は連載小説。最初はわたし（鮫島）が200字で出だしの段落を書きます。それを班ごとに第二話、第三話と展開していくのです。それぞれ15分で作らなければなりません。ここでは話をどう展開させていくかということ学びます。

それから小説づくりへとすすみます。今度は個人でつくりまします。登場人物、場面設定は共通で、各人800字で書く。それを班ごとに出版社に見立てて、コンテストをやります。夏休みの宿題として、文学論を書きます。

II期はまず映像と音楽について学びます。映画をひとつとりあげ、冒頭部の音と字幕を消して、それにあうナレーションと音楽を考えます。

つづいて構図の文法として、モナリザの絵を分析したあと、働く人の写真をとってきて構図を批評しました。さらに「現代社会を撮る」と題して、班ごとに現代社会を写真に切りとってきます。そして、それについて小論文を書く。テーマは、「なぜ、若者は『後ろ向き』の作品を好むのだろうか」です。「後ろ向き」とは、こういうことです。これまで、小説を書いたり、写真を撮影してきたのですが、その内容には共通点がある。それは、暗い話題や不安をテーマとするものが多いということです。意識的にそういったものを選ぶこともあるのですが、なんとなくそうになってしまうということでしたので、これはどうしてそうになってしまうのかについて考えてみたわけです。800字の小論文を書き、相互批評を行いました。社会批評ということになるでしょう。

「後ろ向き」の作品があふれている中で、今度は、現代社会における希望の兆しはどこにあるのだろうか、という問いが浮かび上がってきました。そこで、冬休みの課題として、希望の兆しを探し、それをどのような物語として語るかを考えてみました。その物語を3分間

の映像作品として表現するのであればどのようなになるか。まずは個人で考えてみる。希望の兆しについて200字で書き、それに基づいたストーリーボードを作成することが課題です。

冬休み明けの授業は、各人で考えてきたものを批評しあうことからでした。そうして5つのテーマを選びました。希望に応じて班をつくり、制作作業に入ります。作品名は「バラの行く方、あるいは現代社会における希望の兆し」です。各班がつくった5つの小さな物語によって構成されています。これが映像作品制作のあらましです。

この映像作品制作は、「文化と社会」のカリキュラムの「華」となります。1年間の授業で学んだことの総決算といえるでしょう。年間カリキュラムは、この映像作品制作で必要となる力を分節化して構成されています。ちなみに、06年度と07年度のこの部分については、読売テレビと連携して、3分間のドキュメンタリー制作を行っています。

先ほど、「華」といいましたが、私たちは、映像作品制作に特権的な地位を与えているわけではありません。もちろん、この部分はじつに魅力的であり、生徒たちが生き生きと活動する場面ではあります。しかし、映像作品制作が、年間カリキュラムの一部であることを強調しておきたいとおもいます。大事なものは、映像制作をすすめる上で必要となる基礎的な力にあります。すなわち、書く力、読む力、話し合う力がしっかり育っていなければ、こうした映像制作はうまくすすまないということなのです。このことは、メディアリテラシー教育のカリキュラムを系統的に組む必要性に大きく関わっています。

ここからは、この授業に参加した生徒たち（6名）に登場してもらい、「ひと言でいえばどんな授業か」「なにを学んだか」の2点について、それぞれ発言してもらいましょう。こうした報告では、担当者が一人で話してしまいがちで、生徒自身の声が奪われてしまいがちです。

それは「文化と社会」の授業スタイルに反します。みなさんが関心があるのは、カリキュラムの内容もさることながら、生徒たちが学び取ったことでもあるでしょう。ですから、ここからは受講者の力を借りようというわけです。

(1) 「ひと言でいえばどんな授業なのか？」

- ・「可能性を探す（自分を、他の人を、世界を気づくことが出来た）」
- ・「自他を見つめる（日常生活を楽しめるように）」
- ・「バラバラなものをつなげる（他者とつながる）」
- ・「創造と破壊の繰り返し（自分との、仲間との、先生との、「たたかい」）」
- ・「気づきの連続（集合住宅のたくさんのドアを開けていき、出会う人々と仲良くなっていく過程）」
- ・「自分自身を考え続ける旅（考える、答える、問いかけるの連続）」

(2) 「なにを学び取ったのか？」

- ・「ことばの力の偉大さと怖さ」
- ・「表現を通じて社会とかかわっていくことの面白さと責任」
- ・「話し合いの重要性」
- ・「大事なものは自分を見つめる力とそれを続けようとする気持ちだった」
- ・「考える力、ことばはそのためにある。おしゃべりの言葉と議論する言葉は違う」
- ・「日常生活にたいする批判的まなざしが形成された」
- ・「自分自身のコントロール権を握ることの重要性」

報告後の質疑応答では、「文化と社会」の問題意識・実践方法への共感も去ることながら、受講者の言語能力の高さがその後の議論の中心的テーマとなりました。

奈良女子大学教育システム研究開発センター Newsletter 08

2008年3月発行

奈良女子大学教育システム研究開発センター

〒630-8506 奈良市北魚屋東町

奈良女子大学 コラボレーションセンター204

TEL. 0742-20-3352

Web <http://www.crades.nara-wu.ac.jp/>

mail [crades@cc.nara-wu.ac.jp](mailto:crades@cc.nara-wu.ac.jp)